

太宰府謫居二期」の作品群の中に置かれるべきものと考ええる。その大きな根柢は、この期の作品群の特質の一つに詠題の事物に対する「感情移入」が見られる点、そしてそれが「望京の念」であること、この作品においては「春雪」に託して、三・四句目で中国の古典籍の故事を下敷きに、その感情を込めている事は既に述べた所である。一方、二点目で指摘した「見立て」の技法が、この作品にも見られる事。つまり「雪」の白さを一・二句で「白梅」に、三・四句で「雁につけた帛」、「頭の白くなった鳥」に喩えている点である。

とすれば、なぜ「514謫居春雪」を巻尾に置くという編纂を道真がしたのかという点が重要になってくる。この点の解明の過程の中で既に第二章で取り挙げた「514謫居春雪」の作品の本来の意図するものが見えてくるものと考ええる。

四

ここで想起されるのが次の『江談抄』の一文である。

離家三四月 落涙百千行

万事皆如夢 時々仰彼蒼

雁足粘将疑繫帛

鳥頭点著憶帰家

此句謫居春雪絶句也。而天曆之時 於比良宮御託宣有之、志於我之者可詠此等句云々

〔『江談抄』第四〕⁽¹⁵⁾